

# 北海道＜蝦夷地＞開拓の歴史

## ストーリーの総論

北海道は150年前の五稜郭戦争で、新幕府軍が勝利した時から始まりました。正確には「蝦夷地開拓」です。その立役者は3人おり黒田清隆(役人で現在の北海道開発庁長官)・ホーレスケプロン(アメリカの農学博士)・榎本武揚(五稜郭戦争で敗北した旧幕府軍の総大将であり、徳川家の家臣としてオランダ先進国留学経験の持ち主)現在の「赤レンガ」横にあった「開拓使」において様々な政策立案を行い北海道開拓の拠点となった。

- ・原野開墾のための政策としての「屯田兵と屯田兵村」
- ・刑務所を造り本州から囚人を送り込み基幹道路を造成
- ・北前船を小樽/厚田/積丹などに寄港させる
- ・殖産道路とし現在の北2条通を指定した。現在のサッポロビールはその政策で生まれた産業で現在に至る(赤レンガ門に道路原標が設置されている)
- ・開墾と同時に、農業技術者を育成する札幌農学校の創設(現在の札幌時計台)
- ・原野であった北海道の区割り人と人が住める地域づくり するなど

を行い今の北海道と、世界でも珍しい135年で200万都市札幌が出来上がった。

### ※上記のストーリーで観光見学する対象施設

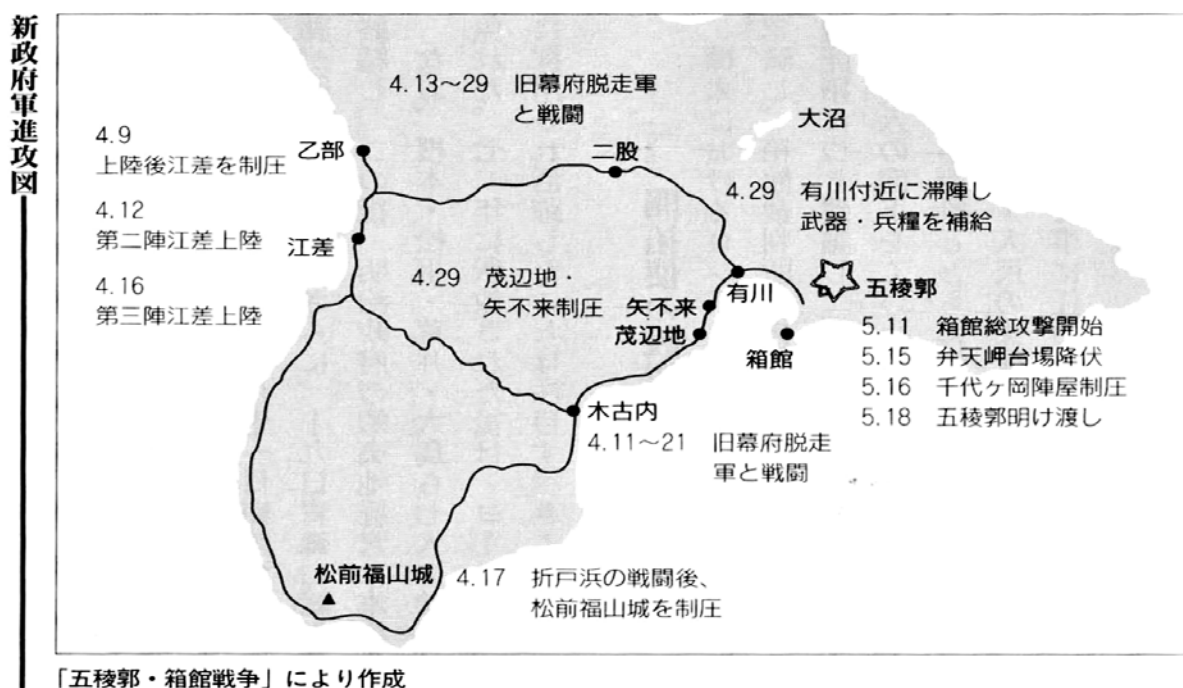
- ・赤レンガ横の「開拓使後」※基礎部分を目地で埋めてあり大きさがわかる  
開拓使の写真は5ページ
- ・大通11丁目にある立役者2名の銅像
- ・札幌農学校であった札幌時計台→のちの北海道大学と発展しクラーク登場
- ・北2条通りファクトリーのサッポロビール工場跡(レンガ造り)
- ・旧永山武四郎邸(黒田清隆の後任として活躍)
- ・鯨番屋と鯨御殿 鯨粕製造
- ・各地に残る屯田兵村跡



Jエコツアー(株)／北海道ガイドテキスト

「蝦夷共和国」と箱館戦争（箱根戦争の結果が北海道開拓の始まり）

榎本らが占領した箱館は幕末以来の開港場で、諸外国の領事等の外交官や商人たちが居留する国際的に重要な土地であった。諸外国は既に1868年1月、戊辰戦争について局外中立の立場を宣言。榎本は同年11月イギリス・フランスの領事や艦長らと面会し、彼等が叛乱軍・賊軍でないことを説明した。両国は外国居留民の生命・財産を保護し、条約が侵害されないことを見守り、国内の内紛には中立の立場をとることを明らかにするとともに、徳川家臣団が「事実上の政権」であることを認めた。ついで、役職を決定した：総裁榎本釜次郎（武揚）、陸軍奉行並土方歳三。



この榎本政権については、イギリス・フランスから「事実上の政権」と認められ、役職が共選されたことなどから「蝦夷共和国」と呼ばれることもあるが、それは実態を伴わない幻の地方政権ととらえるべきであろう。一方、新政府は一貫して榎本らの徳川家蝦夷地領有・開拓の願いを拒否し、彼らを逆賊、朝敵と見なした。

また、幕府が既に購入していた最新鋭の甲鉄艦をアメリカから受け取って政府軍の旗艦とし、翌年2月には黒田清隆を青森口総督府参謀に任命して榎本軍鎮圧の準備を進めた。5月11日海陸両方面からの箱館総攻撃が始まり、17日榎本らが降伏、翌日五稜郭が明け渡された。さらに、19日青森口総督清水谷も箱館に戻り、平定を祝った。こうして、戊辰戦争は終結し、この後、明治政府の蝦夷地経営は本格化する。



▲フランス軍士官と旧幕府脱走軍士官（函館市中央図書館蔵）

なお、榎本は東京に送られたが、黒田や福沢諭吉らの尽力により死罪を免れた。1872年に釈放された後は、ヨーロッパ留学などで得た経験や実力が高く評価されて開拓使の官僚等に採用され活躍したことは注目すべきことである。

#### 開拓使の設置

島義武(元佐賀藩士)・松浦竹(武)四郎らを蝦夷開拓御用掛に任命した。

1869年7月8日(西暦8月15日)、政府は官制改革を実施し、先月の版籍奉還とあわせて、天皇中心の中央集権的国家体制が成立した。この改革と同時に太政官に属する臨時的機関として開拓使を置き、13日には鍋島を開拓長官に任命したが、翌8月東久世通禧に交代した。ついで箱館府知事清水谷公考を開拓次官、島義武・岩村通俊(元土佐藩士)・岡本監輔・松浦武四郎・松本十郎・杉浦誠らを開拓判官に任命した。開拓長官の身分は諸省の卿(長官)と同等で、その任務は各地の開拓を総括することであった。

開拓使の本庁は、当初民部省に置かれたが、8月太政官に移り、9月に函館に出張所が置かれた。その後、業務の進展に伴い70年10月、函館が本庁、東京が出張所となり、ついで1871年5月、本庁はさらに札幌に移り(札幌開拓使庁)、函館は開拓使を置いたが、翌年8月に廃止し北海道開拓使に統合した。

開拓使設置の翌月、すなわち1869(明治二)年8月15日(西暦9月20日)、政府は蝦夷地を北海道と改称し、11カ国・86郡を画定した。これは蝦夷地が日本国の家の領土であり、従ってそこに居住するアイヌ民族も日本の国民であることを宣言したことを意味する。

政府は68年4月、後日蝦夷を改称し、南北二道を設け、国名を定める方針を明らかにします。この道名・国郡名の決定にあたっては、当時蝦夷開拓御用掛だった松浦武四郎が1869年7月に提出した案が重要な役割を果たした。松浦は幕末に六度にわたり蝦夷地を踏査し、地図を残した蝦夷地に関する第一人者であった。